

Nara Women's University

2008年度若手研究者支援プログラム第一部 特別講義 関連分野の学び方 「訓点資料入門」 当日配布資料

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学21世紀COEプログラム 公開日: 2012-03-12 キーワード (Ja): 訓点資料 キーワード (En): 作成者: 大槻,信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2917

奈良女子大学 21世紀 COE プログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
2008年度 若手研究者支援プログラム

2008年8月9日(土)

特別講義 関連分野の学び方

訓点資料入門

大槻 信¹ (京都大学)

0 ■訓点資料が上代文献の読解に役立つこと■

- 契沖 日本書紀・文選・遊仙窟の訓点本(近世の版本)
- 橋本進吉「万葉集の語釈と漢文の古訓点」(『日本文学論纂』、1932.06、著作集五『上代語の研究』1951.10所収)
- 春日政治『万葉片々』(春日政治著作集／春日和男編集・解説、第5冊、勉誠社、1984、初版は丁字屋書店、1948)
- 大野晋「奈良朝訓詁断片 —— 訓点語利用による ——」『国文学』(関西大学国文学会)、05、1951
- 大坪併治『訓点語の研究』(『改訂 訓点語の研究』上下、大坪併治著作集1・2、風間書房、1992/1993、初版は『訓点語の研究』風間書房、1961.3)

これらは訓読語の「古語的性格」(遠藤嘉基 1953:101、築島語研 1963:55)² を援用し、上代文献資料の欠を補うものとして訓点資料を利用したものと言えよう。

また、題詞・左注などの漢文部分の理解においても、訓点研究は万葉の読解を助けることが大きい。

1 ■訓点資料概説■

1-1 ■概観³

日本語が初めて出会った文字は漢字であった。中国の文化は主として漢字漢文という形で日本に移入された。

漢訳仏典をはじめとする漢文を、自国語で理解しようとする営みが「訓読」である。訓読という現象は東アジアを中心とする漢字文化圏において広く見られる。しかし、その中であって、訓点というシステムを高度に発展させ、かつ長い期間にわたってそれを使用した国は日本において他にない。

1 ootsuki@bun.kyoto-u.ac.jp

2 略称する研究文献名については、以下の「訓点資料研究史」参照。

3 以下は、大槻信「訓点資料」(『学びの世界 — 中国文化と日本 —』平成十四年度京都大学附属図書館公開展示会図録、京都大学附属図書館、2002)を基礎に、記述を改めたものである。

訓読は中国文化、仏教文化の移入にとどまらず、語彙・語法・表記など様々な面で日本語に甚大な影響を及ぼした。現代日本語の源流の一つとして漢文訓読語をあげることができる。

日本では、漢文を読解するための補助手段として、漢文本文に返点・仮名・ヲコト点などを記入することがあった。返点により語順を示し、仮名によって訓や音を表す。ヲコト点は字画の様々な位置に点や線を施すことで、助詞・助動詞のような助辞や活用語尾などを表示した。これらの注記・符号を「訓点」、訓点が施された文献を「訓点資料」と呼ぶ。訓点という方式は（現存の資料による限り）仏教の世界で生まれ発展したものである。

訓点はもともと個人の備忘に発し、その形態もまちまちであったが、学問の累積に従い、その方式も訓読自体も固定化が進む。それに伴い、漢文本文とそれに付された訓点とが次第に密接に結びつくようになった。訓点・訓読は、漢文を理解するための補助手段から、漢文を読むことそのものへと転じていく。それは、日本語を経由して効率よく中国文化を吸収する方式の確立を意味し、反面で中国文化からの乖離も意味した。

1-2 ■ 仏書・漢籍（・国書）

○ 仏書

平安時代の加点本で、現在までに確認調査されたものだけでも 5000 点ほどある。

平安初期の加点本が現存する。

ただし、伝存する仏書訓点資料は 1000 年以降のものが多く、大半が 1050 年以降の加点である。

○ 漢籍

『周易抄』（宇多天皇宸翰、9 世紀末）が一番古い。乙点図（第五群点）使用。

漢籍加点典籍として現存するのは、10 世紀、延喜年間以降。

毛詩（東洋文庫）、漢書（上野本）、古文尚書（東洋文庫・東博・東山御文庫）など。

平安時代全体でも 20 数点しかない。

○ 国書

他に日本書紀のような国書に加点したものもある。

1-3 ■ 加点の歴史

科段点・句読点・返点 > 万葉仮名 > 片仮名・ヲコト点 > 片仮名（仮名点本）

日本における訓点発生の歴史的経緯は、「句読点・語序点→仮名点→ヲコト点」の順である。

句読点・語序点を記す現存最古の資料は『続華嚴経略疏刊定記』（華嚴刊定記）巻第五（大東急記念文庫蔵、783・788 加点）。

万葉仮名による加点はヲコト点に先立っておこり、平安時代極初期の万葉仮名を用いた資料が残存する（聖語蔵『阿毘達磨雜集論』平安極初期点・醍醐寺蔵『梵網経』平安極初期点など）。

ヲコト点と片仮名を組み合わせるのが平安時代の訓点資料の一般的形態である。

十一世紀後半から、ヲコト点を仮名に改め、専ら仮名点のみを用いる資料が多くなり、十二世紀（院政期）に急増する。（鎌倉時代以降は、ヲコト点の衰退により、訓点といえば、返点と仮名とを墨で付すことが一般的になった。）

1-4 ■片仮名

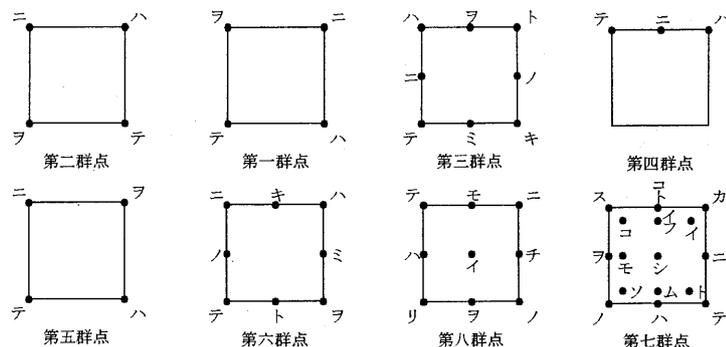
漢文訓読の世界で発達した文字が片仮名である。片仮名は、漢字を用いて日本語を表記した万葉仮名を母胎に、それを省画化することで生み出された。

1-5 ■ヲコト点

ヲコト点はテ・ニ・ヲ・ハのような頻出語を簡略に表示するための手法であり、仮名と相伴って用いられた（ヲコト点だけの資料はない）。ヲコト点には数多くのパターンがあり（約200種類が報告されている）、宗派や寺院ごと、場合によっては師資相承のレベルで使い分けられた。ヲコト点全体は中田祝夫⁴により八つにグループ化され、成立順に第一群点から第八群点と命名されている。現在では、築島裕⁵による補訂を受け、おおよそ

第二群点、第一群点、第三群点、第四群点、
第五群点、第六群点、第八群点、第七群点

の順に発生したものと考えられている。ヲコト点は平安時代初期に南都古宗（東大寺や興福寺など）の僧侶の間で生まれ、進取の気風に富んだ天台宗において多様な発展を遂げた。その後、俗家にも伝わり、漢籍を読むための博士家点が生まれる（俗家の点はすべて第五群点に属する⁶）。



▲【資料A】西墓点点図 築島裕『訓点語彙集成』第一巻、汲古書院、2007

4 中田点研 1954。

5 築島点図 1986。

6 ただし、漢籍加点点資料である『春秋経伝集解卷第二』（藤井有鄰館蔵）に第一群点が使用されていることが小助川貞次により報告されている。

1-6 ■白点・朱点・墨点・角点・絵の具

●白点

白点は胡粉などを溶いた修正用の白液を用いて訓点を記入したものである。

初期の仏典書写の料紙は黄麻紙やそれを模した黄穀紙が多く、黄色地の上では朱点よりも白点の方が見やすいという実用性から白点が使用された。

そのため、仏書を中心とする初期の訓点資料には白点資料が多い。

時代が下ったものにもある（喜多院点加点資料など）。

○読みがたい白点

大坪併治『改訂 訓点語の研究』下、大坪併治著作集2、風間書房、1993:455

「本点（大槻曰「大東急記念文庫本大乘広百論釈論承和点」）は、昭和三十一年の夏、川瀬一馬博士によって発見された。博士はその経緯を八種の和歌に詠じてられるから、左に紹介させて頂かう。

白点古経

大東急記念文庫にて古経の解題を草せんとて調査の折節、珍しき国語研究資料なる承和八年七月八日の識語ある大乘広百論釈論卷十の一軸を見出したれば

見え難き白墨点をふと読みぬ光を負ひて経巻きをれば

窓近き淡き光りの影にして白墨点は現れにけり

数百年知られざりけん白墨の点よみ出でし幸を喜ぶ

今日見ずは何時の世にまた認むべきめづる節なき一軸の経

大治なる修補奥書ありとのみ皆人見たる経にてありしを

白点をうつしとらんと日とひと日影を求めて写真師はわぶ

承和の文字まさしくあれど白点の光りの中にかげ見えぬなり

白点を調ぶる友に喜びの文やりたれば病み臥すといふ

昭和三十一年七月 川瀬一馬詠

博士の喜びは、直ちに現代国語学会の喜びであり、貴重（原文「量」に作る）な新資料発見の功績は、高く讃へられなければならない。右の和歌にある「白点を調ぶる友」とは中田祝夫博士のことである。」

白点は、暗所で、光を背負うようにして、斜め光線に当てるとよく見える。

○白墨の素材

胡粉・鉛白・白土

●朱点

最も一般的な加点材料。

●墨点

消せない。本文と同じレベル。

(博士家では、平安後期以降、ヲコト点を朱、仮名点を墨で記入するのが一般的となった。この方式を朱墨両点と呼び、鎌倉時代以降、仏家にも行われた。)

●角点 ((角筆点))

角筆を用いて紙をくぼませる。

加点年代が不明であるのが、最大の欠点。

1-7 ■訓点資料の長所

訓点資料は基本的に漢文資料でありながら、訓点によって当時の訓読を復元できることから、日本語の研究資料(とりわけ平安時代)として重視されている。訓点資料により明らかにされた国語史上の事実も多い。

1. 一次(一等)資料であること。加点当時のものがそのまま現存している。校訂の必要なし。
2. 年代が特定できること。
3. 分量が多いこと。
4. 平安初期の資料の空白(国風暗黒時代)を埋めることが可能なこと。

1-8 ■訓点資料の短所⁷

1. 訓点の認定・解読が困難であること。補読の必要性が高く、完全な解読が困難であること。誤脱を含む粗雑な加点があり、正確な語形推定の必要性が多いこと。特に白点・角点については読みがたいものが多いこと。
2. 訓点資料の数は多いが有益な国語資料となる文献は一部に過ぎないこと。また、仏書などは定型表現が多く、言語としてのバリエーションが乏しいこと。
3. 移点が多いこと。どの時代の言語と見なすべきか問題がある。
4. 加点年代が不明なものが少なくないこと。(特に平安初期。角筆点)
5. 訓点資料の言語が、漢文訓読語という独自の位相を形成し、決してその時代の言語体系の代表となるものではないこと。
6. 原本調査の必要度が高いこと。
7. 原本調査が困難であること。

7 築島裕「訓点語研究の足跡を辿って」(訓点語学会講演 1993.10)の「訓点資料の国語資料としての欠陥の認識の必要性」を参照して、再整理した。

2 ■訓点資料研究史⁸■

2-1 ■研究書・研究論文・レファレンス

(単行書)

大矢透

大矢透 編『仮名遣及仮名字体沿革史料』(国定教科書共同販売所、1909)

吉澤義則

吉澤義則『国語国文の研究』(岩波書店、1927)

吉澤義則『点本書目』(岩波講座 日本文学、岩波書店、1931)

春日政治

春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』1942

春日政治『古訓点の研究』1956

春日政治著作集

遠藤嘉基

遠藤嘉基・廣浜文雄編『新版 点本書目』(明治書院、1957)

遠藤嘉基『訓点資料と訓点語の研究 改訂版』(中央図書出版社、1953)(初版、京都大学文学部国語学国文学研究室国文学会、1952)(再版、中央図書出版社、1971)(復刻、臨川書店、1981)

中田祝夫

中田祝夫『古点本の国語学的研究 総論篇・譯文篇』(改訂版、勉誠社、1979)(初版、大日本雄弁会講談社、1954)

大坪併治

大坪併治『訓点語の研究』1961

大坪併治『訓点資料の研究』1968

大坪併治『平安時代における訓点語の文法』風間書房、1981

大坪併治著作集

築島裕

築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会、1963)

築島裕『平安時代語新論』(東京大学出版会、1969)

築島裕『平安時代訓点本論考 ヲコト点図仮名字体表』(汲古書院、1986)

築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』(汲古書院、1996)

小林芳規

『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(東京大学出版会、1967)

8 詳しくは築島裕「訓点語学研究史」(『訓点語辞典』2001: 4 ff。内容は訓点語学会講演 1993.10、それを原稿化した「訓点語研究の足跡を辿って」『訓点語と訓点資料』93、1994.03 に基づく)を参照のこと。

沼本克明

沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院、1982

沼本克明『日本漢字音の歴史』、国語学叢書 10、東京堂出版、1986

沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院、1997

松本光隆

松本光隆『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』汲古書院、2007

(雑誌)

訓点語と訓点資料

鎌倉時代語研究(終刊)

高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集

国語学⇒日本語の研究

国語国文

国語と国文学

(レファレンス)

吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸編『訓点語辞典』東京堂出版 2001 8500円

(入門・概説)

遠藤嘉基「点本入門【国語学入門講座】」国語学、010、1952

築島裕「訓点資料とその取扱ひ方」国語と国文学、37-10、1960⇒築島語研 1963：第二章第一節 総説

月本雅幸「I 資料・史料をどう扱うか 訓点資料」『日本の仏教 5 ハンドブック 日本仏教研究』法蔵館、1996：50-58

月本雅幸「日本語史研究の楽しみと悩み」日本語史研究入門(雑誌「日本語学」の2000年9月臨時増刊号、vol 19) 明治書院、2000

2-2 ■訓点資料の書目・目録・解題

○吉澤義則『点本書目』(岩波講座 日本文学、岩波書店、1931)

○遠藤嘉基・廣浜文雄編『新版 点本書目』(明治書院、1957)

○築島新論 1969

○築島点図 1986

○築島論考 1996

- 『国語学研究事典』1977 ⇒ 『日本語学研究事典』2007
- 『国語学大辞典』1980
- 『訓点語辞典』2001

- 高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺経蔵典籍文書目録』1973-1982
- 京都府教育委員会『東寺観智院金剛藏聖教目録』1975-1986
- 石山寺文化財綜合調査団『石山寺の研究』1978-1992

訓点資料総目録の必要性⁹。

2-3 ■影印・訳文・索引

『訓点語辞典』2001：5-8 に主たるものの一覧があり、：127 ff に訓点資料各書の解題がある。

春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』1942

中田祝夫『古点本の国語学的研究 譯文篇』（改訂版、勉誠社、1979）（初版、大日本雄弁会講談社、1954）

築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の國語學的研究譯文篇・索引篇・研究篇』東京大学出版会、1965-1967 # 6 種類の訓点

大坪併治『訓点資料の研究』風間書房、1968

高山寺典籍文書綜合調査団『高山寺古訓点資料第一・第二・第三・第四』東大出版会 1980・1984・1986・2003

雑誌『訓点語と訓点資料』にも影印・訳文・索引が多く載る。

2-4 ■築島裕『訓点語彙集成』

▲【資料B】築島裕『訓点語彙集成』

著者築島の長年の調査による、訓点資料からの語彙の集成。

全8巻、別巻1（漢字索引）。

2007年より刊行開始。2008年07月現在、「第五巻 た〜と」まで刊行。

2009年に完結の予定。

書評 前田富祺 訓点語と訓点資料 120、2008

9 月本雅幸 2004：18。

2-5 ■訓点資料研究の現状と問題点

現在、停滞期にあると言われる。

「[報告] フォーラム (日本語史研究と訓点語学会)」訓点語と訓点資料、第 112 輯、2004 月本雅幸「訓点語研究の現状とその将来」訓点語と訓点資料、第 112 輯、2004

問題点としてよく指摘されるのは、
資料に触れることが難しい。
若手不足。

それ以上に問題なのは、訓点の研究が面白そうだという実感が失われていることである。「国語史や国文学を研究するための材料を提供してくれる職人」的な扱い。

○索引

○豊島正之『キリシタン版ぎやどぺかどる 本文・索引』緒言

「本書の索引は、「ぎやど」本文を読む者の為の索引であって、読まずに済ます為のそれではない。「読まずに済ます為の索引」として本書を利用した結果に就ては、保証の限りでない。」

○残された課題はあるのか

○訓点資料自身に関わる根本的な問題

訓点資料とは何か、なぜ翻訳しないのか、
訓点はいつ・どこで・どのようにして始まったのか、
訓点を付すとはどういうことか、符号の起源はどこにあるのか、
何によって訓点を付しているのか、学問的背景はどのようなものか、
訓点を付す具体的な過程はどのようなものか、
訓点を付す部分と付さない部分とはどのように異なるのか、
仏書と漢籍の訓読はどのような関係を持つのか、
訓法の具体的な変遷はどのようなものか、……

○記述から論へ展開することが望ましい。

○濱田敦『纂輯日本訳語』はしがき (京都大學文學部國語學國文學研究室編、京都大學國文學會、1968)

「しかし、このしごとの本来の目的は、勿論、研究のための資料の整理であって、決して資料

の整理それ自身が目的ではなかったはずである。幸いにして私にまだいくばくかの余命が与えられるならば、これから他の研究者と同じ出発点に立って、この整理した資料を、本来の目的である研究のために、役立てることを始めたいと考えている。」

○「少く読み深く考ふべし」

浜田 敦（『濱田教授退官記念 国語学論集』所収の佐竹昭広の惜別に引く。また濱田「はじめての論文」にも「少く読んで多く考えよ」のかたちで引かれる。）

2-6 ■今後の訓点資料研究

○メイエの批判

「しかしながら、〇〇学は現在に至るまで、……、〇〇が発達する社会環境についてのあらゆる系統だった考察とは、ほとんど無関係だった。……。しかし、このような〇〇の事柄に関する狭い考察から抜け出なければ、そこから得られることと言えば、これらの事柄の間にある多少とも明確な同時性あるいは連続性の関係を確認することくらいであって、〇〇の出現と生成を決定する一般的条件が何かということを確認にすること、つまり、原因を突き止めることは決して出来ないだろう。」

アントワヌ・メイエ、松本明子訳『いかにして言語は変わるか アントワヌ・メイエ文法文化論集』ひつじ書房、2007：54-55（底本は1982年刊の編著。初出は1905-1906年『社会学年報』）

○非専門家の参入

○今後の訓点研究

訓点資料を総体的かつ相対的に見る視点が必要であろう。

3 ■訓点資料調査の実際■

○「訓点語学研究法」（月本雅幸）（『訓点語辞典』2001：21 ff）

3-1 ■研究書・研究論文・レファレンス

博物館・図書館（公私）・文庫・大学

社寺

真言系寺院 石山寺・高山寺・醍醐寺・仁和寺・大覚寺・随心院・勧修寺・東寺

3-2 ■調査に必要となる知識・能力

常識

資料の取り扱い

書誌学

漢文読解力

仏教学

3-3 ■調書

▲【資料C】調書例

3-4 ■奥書・識語

書写・加点（・移点）について、重要な情報を多く提供する。

○加点年紀奥書を持つこと・持たないことの意味

平安時代初・中期（9・10世紀）の古い訓点資料では加点年紀を明示するものが非常に少ない。築島論考1996：26の集計によると、年紀のあるものは、平安初期で7.7%、平安中期で21.2%にとどまる。これは、この時代、訓点の記入が備忘的・個人的なものであったことを意味していよう。

時代が降るにつれ、加点さらには移点そのことが、意義あることとして認識されるようになり、文字として記録されるようになる。（平安後期11Cで62.5%、院政期12Cで64.3%）

築島裕「平安時代の加点の功德」『日本語研究の諸領域の視点』下、平山輝雄博士米寿記念会、1996

●僧名

○『日本仏教人名辞典』法蔵館、1992

○松本光隆「僧名露視稿（一）」基盤研究（B）（1）研究成果報告書 近畿地方密教寺院所蔵の国語資料についての総合的調査研究 研究代表者：松本光隆（平成11-14）、2003

○宇都宮啓吾 聖教データベース <http://www.orcaland.gr.jp/~utsunomiya/>

●所蔵印

3-5 ■書写・加点年代の判定

紙質、書風、字体（特に片仮名）、ヲコト点形式、訓法、諸符号（返点など）、言語事象、など

●時代区分（高山寺目録による）

奈良時代 和銅～天応 708- 781

平安初期 延暦～昌泰 782- 900

平安中期 延喜～長保 901-1003

平安後期 寛弘～応徳 1004-1086

院政期 寛治～元暦 1087-1184

鎌倉初期 文治～寛喜 1185-1231

鎌倉中期 貞応～弘安 1222-1287 (貞応～寛喜間は弁別困難につき重複)

鎌倉後期 正応～元弘 1288-1333

南北朝時代 正慶・建武～元中・明德 1334-1393

室町初期 応永～嘉吉 1394-1443

室町中期 文安～延徳 1444-1491

室町末期 明応～永禄 1492-1569

桃山時代 元亀～慶長 1570-1614

江戸初期 元和～延宝 1615-1680

江戸中期 天和～安永 1681-1780

江戸末期 天明～慶応 1781-1867

3-6 ■ 仮名・ヲコト点の判別

○ 仮名・ヲコト点を判別することの意味

○ その方法

基本的には、帰納法。

○ 仮名字体表・ヲコト点図

▲ 【資料D】 仮名字体表・ヲコト点図 (記入用) 『訓点語辞典』2001: 22-23

▲ 【資料E】 仮名字体表・ヲコト点図 (実例) 勸修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点¹⁰

10 石塚晴通・大槻信「資料紹介 勸修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点」訓点語と訓点資料、第111輯、2003

【そのための参考資料】

○片仮名の字体表

小林芳規『図説日本の漢字』大修館書店、1998：巻末折り込み

○点図集

築島裕『訓点語彙集成』第一巻、汲古書院、2007：168-198

●複数加点

重ねて加点されている場合がある。

興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝（延久三年 1071 写）6 種類の加点（朱 2 種、墨 4 種）。

3-7 ■頻用されるヲコト点による判別法

○頻用されるヲコト点¹¹

西墓点（第一群点）	園城寺
喜多院点（第二群点）	興福寺法相宗・法隆寺・中川成身院・浄瑠璃寺・高野山
東大寺点（第三群点）	東大寺・醍醐寺・高野山・勸修寺・石山寺
中院僧正点（第三群点）	高野山中院流
円堂点（第五群点）	仁和寺・高野山
宝幢院点（第七群点）	延暦寺

○簡易判別法

1. 資料のうち、加点の周密な部分を探し出す。（多くの場合、巻首）
2. その部分の漢文を読解する。
3. その上で、ヲノテニハといった頻用される助詞が差されていると強く推定される箇所を見出す。
4. この点は「ノ」であろうと推定できれば、同じ位置に差されている点を探し、検証する。
5. それを、ヲノテニハについて繰り返す。
6. 【別表】（▲【資料F】星点位置一覧）を見る。⇒群点の推定。
7. 星点以外のより複雑な形状を持ち、使用頻度も少ないヲコト点について、点図と対照してみる。

3-8 ■抄録・摘記

研究者の目から見て、重要な部分を抜書する。⇒複数の人が調査する必要。

11 築島点図 1986 参照。

3-9 ■移点本の作成

○移点作業

1. 可能であれば、最初に写真撮影しておく。(2. が容易になる。全体を一覧できる。)
2. テキストを入力し(大正蔵の電子テキスト等を使う)、文字配りを原本通りにしておく。
3. 移点に際しては、機械的に移すのではなく、必ず訓読しながら移す。
4. 訓点を写し取るのみならず、ヲコト点については、必ずその読みを傍記しておく。どの点として認識したのかをメモする。必要に応じて、訓み下し文にしたものをメモすることもある。

▲【資料G】移点本 勸修寺蔵金剛頂經

4 ■訓点資料を読む■

▲【資料H】訓点資料を読む 京都大学文学部蔵 金剛頂經卷第三 卷首

5 ■訓点資料の限界■

訓み下し文は絶対的・確定的なものではない¹²。

●研究者によって訓みが異なること

○大唐三蔵玄奘法師表啓

吉澤義則「大唐三蔵玄奘法師表啓の訓点」芸文、1915

築島裕「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点」訓点語と訓点資料、004、1955

遠藤嘉基「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点について」国語国文、24-11、1955

中田祝夫「古訓点閑談(その一) ——知恩院蔵本大唐三蔵玄奘法師表啓の古訓点稿——」

漢文教室、30、1957

山田忠雄「知恩院蔵本大唐三蔵玄奘法師表啓古点の研究」国語学、29、1957

その他公表されている訓み下し文についても、追試は不可欠であろう。

複数の解説文が示されているものの一覧(五例のみ)は築島裕「訓点語研究の足跡を辿って」『訓点語と訓点資料』93、1994.03:29-30にある。

12 『訓点語辞典』2001:15(築島裕)「総じて、公表された訓点資料は、決して絶対的な資料的価値を持つものではなく、今後も複数の研究者によって、より正確な解説を推進すべきものである。」

●なぜ訓みが異なるのか

- ・複数加点されている場合、その認定

- ・仮名・ヲコト点の認定

仮名はもちろん、ヲコト点についても差されている位置の認定は容易でない。

漢字の字形がそれぞれに異なり、点図に想定されるような正方形に該当するような漢字ばかりではないため、加点位置は相対的なものでしかない。絶対的に同じ位置に加えられるわけではない。

例えば、浄光房点で「ノ」と「ト」とが差される位置は隣接しており、その判別は、位置と言うよりもむしろ文脈による。（【資料 E】参照）

- ・仮名・ヲコト点の順序

複数の仮名・ヲコト点に加えられている部分について、その順序配列は解釈によって決定される。どのような順序で読むべきかは、訓点資料には示されていない。

ヲコト点か助詞・助動詞・語尾等、仮名が和訓を示すことが多いが、必ずしも二分できない。ヲコト点を用いて和訓の全体あるいは部分を示すこともあり、助詞・助動詞が仮名によって示されることもある。仮名とヲコト点は両者相俟って機能する。

例えば、知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓で「奨」字に対して仮名で「ケ」、ヲコト点で「す」「た」とある。これは、「たすケ」であろう。

- ・補読

() 内の補読は推定である。仮名・ヲコト点によって完全な訓み下し文となしうるものは少ない。和訓も全形が示されないことがある。例えば、知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓で「猥」字に対して右に仮名で「アマテ」とある。これは、「ア（や）マ（ち？）テ」であろう。

- ・粗雑、誤り

訓点の記入そのものが粗雑であったり、誤っている場合がある。漢文の誤読、間違った加点（点を間違える、位置を間違える）、間違った移点。このようなケースは、想像されている以上に多い。初期においては、講義を聴聞しながら記入するために誤ることがあり、後期においては、移点による誤りがある。その場合には、解読者が正しい形を推定することになる。

訓点資料が加点されたままの一次資料だ、という点に異存はないが、一次資料だから、完全だ、正確だということにはならない。それは、自筆本が完全無欠でないのと同じ。

○訓み下し文は一つの解釈に過ぎない。

訓点資料を使う際、原本にかえることは難しいとしても、できれば影印で確認することが望ましい。少なくとも、訓み下し文に他の可能性がないかどうかを疑ってみた方がよい。

○築島裕「漢文訓読研究の将来」日本語学、19-11、2000：8

「現在、刊行されている古語辞典の類を見ても、最近のものは、訓点資料の用例を相当に引用しているものもあるが、それらは何れも、訓点を訓み下しにした漢字平仮名交り文であり、原文の仮名とヲコト点とを区別して表記したものは見られない。訓点資料を国語資料として活用するためには、仮名とヲコト点とを区別し、解読者が補読した部分を区別することが、必要最低限の要件である。」

6 ■訓点資料と万葉集研究■

○異なった位相

○語彙レベルの議論

○築島語研 1963：6-7

（橋本進吉、春日政治の研究を引いた上で）「以後の訓点学者が殊に注意を集中した所である。しかしかやうな研究は、訓点資料研究の副産物として期待すべきものであり、最初からかやうな成果だけを目的として訓点資料を扱ふことは、訓点資料から珍奇な傍訓だけを漁る等の結果に陥り、資料の一端のみを観て全貌を見失ふ虞無しとしないものである。」

○古辞書・音義の利用

大槻信「平安時代の辞書についての覚書」『國文學』（学燈社）第50巻5号、2005

とにかく使えることがかえって害をなす場合がある。古辞書はしばしばそれに該当しよう。古辞書を使えば、ひとまずの解答を引き出すことができるというケースは多い。しかし、「ひとまず」に安住し思考を停止することほど、学問の本質から遠いことはない。学問というのは、簡単に分かったこととはしないという手続きに他ならないからだ。

辞書は、それとして興味深い研究対象である。しかし、筆者について言えば、なにも辞書を研究したくて、その研究を始めたというわけではない。国語学国文学の世界では、何を研究するにせよ、古辞書のお世話にならないということはない。辞書を使いこなすイロハを身につけることが、研究の第一歩といってよい。

そのようにして、古辞書を使用する中で、筆者にはぬぐい去れない違和感があった。それは次のようなものである。

本当の意味で辞書が使えているのだろうか。自らの研究に都合よく辞書の記述を利用しているだけではないか。

辞書は語彙だけでなく、文字、音韻等の研究資料としてさかんに利用される。古典文学

の注釈に用いられることも多い。しかし、研究に役立つ部分をつまみ食いするだけでは、総体的な理解は望めない。全体として理解することがなければ、部分も有効に活用できないはずである。辞書自体の性格に目をつぶったまま、部分利用を繰り返しても、本当の意味で辞書が使えたことにはならないだろう。

我々が資料に臨む場合、「利用できるから利用する」となってしまうがちである。だが、利用に先立ち、その資料がどのような性格のものか、その資料がある研究目的に利用できるとはどういうことか、また、資料全体の中でその利用可能な部分はいったいどのような位置に立つものか、といった問いかけを欠いては、むしろ逆に資料に使われることになる。古辞書を使いながら、時に、辞書を使っているのか、辞書に使われているのかわからないと感ずることがあった。そのような違和感から、辞書そのものについて研究せざるを得なかったというのが実情である。

- 訓点資料は何も、上代語を保存するために加点されているわけではない。加点は理解行為の一端である。また、万葉集・上代文献研究に活用されている部分が、訓点資料の中心的・代表的な部分でもない。

7 ■【おまけ話】原本調査 資料をさわることの重要性■

- 書物の物理的形態を実感することの重要性

形態が内容を規定する、内容が形態を規定する。

- 粘葉装柶型
- お経のフォーマット
- 卷子本の不便さ

●卷子本⇒冊子本

卷子本：シーケンシャル

冊子本：ランダム

●卷子本という条件

8 ■まとめ■

- 訓点研究は完成した知識ではない。
- 訓み下し文は解釈である。

○訓点調査の実際。

○オリジナルに触れることの重要性。

●最後に

○山田忠雄「知恩院蔵本大唐三蔵玄奘法師表啓古点の研究」国語学、29、1957 06:37「まへがき」

「予、もとより 職として 訓点研究に したがふの 徒に あらず。ただ、従来 やや 特殊性を もって みられたる 古訓点資料の 一般国語学徒に ひろく 公開せられ、自由討究に ゆだねられん ことを こひねがふ 点において 人後に おちぬものなり。こたび 本稿を ものせしは、一にみぎの 主張を つらぬかんと する ころみに ほかならず。事情 みぎのごとく なれば、専門家の めより すれば わらふに たへたる ことども さだめし おほからむ。また、さいはひにして いささかの とるべき ありとも、かの をかめ八目の 類を いでざるべし。」

○京都大学と訓点資料研究

訓点資料の近代的研究は大矢透を嚆矢として、その後、京都大学の吉澤義則、遠藤嘉基によって進められ、卒業生からは春日政治・大坪併治などが出た。「訓点語学」発祥の地である京都大学は、附属図書館・文学部を中心に貴重な訓点資料を多く蔵する。中でも、『蘇悉地羯羅經』、『蘇悉地羯羅經略疏』は西墓点・乙点図と呼ばれるヲコト点のそれぞれ現存最古の加点点資料として著名である。

○訓点語学会

訓点語学会 web ページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/kuntengo/>

■資料一覧

▲【資料A】西墓点点図 築島裕『訓点語彙集成』第一巻、汲古書院、2007

▲【資料B】築島裕『訓点語彙集成』

▲【資料C】調書例

▲【資料D】仮名字体表・ヲコト点図（記入用） 『訓点語辞典』2001:22-23

▲【資料E】仮名字体表・ヲコト点図（実例） 勸修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点」

▲【資料F】星点位置一覧

▲【資料G】移点本 勸修寺蔵金剛頂経

▲【資料H】訓点資料を読む 京都大学文学部蔵 金剛頂経卷第三 卷首

▲【資料C】調書例

■資料名 金剛頂經 卷第三 (京都大学文学部蔵)

●調査日 2003/03/27

●調査場所 附属図書館 (普通 貴重) 文学部 (普通 貴重) その他 ()

●所在・分類番号

文学部 国文学 To2

●受入番号

158939

大正5年1月20日

●名称 (仮題は〔 〕)

金剛頂一切如来真實攝大乘現證大教王經第三

●包紙 (表書) (内書)

●表紙 共紙表紙、素紙 (白紙)、原表紙、後補表紙、

(色・模様・素材) 茶・雲母引き花卉紋様の後補表紙 (裏表紙は27丁目に直接貼り付けている。そのため識語を隠す。)

右下「傳持俊嚴」(「傳持」右肩に合点)

題下「玉泉寺常住」

左下「今者／傳領／遍勝」(「遍勝」右肩に合点)

△軸・紐

●題

(帙題)

外題 「金剛頂瑜伽經卷第三」

内題 「金剛頂一切如来真實攝大乘現證大教王經第三」

尾題 「金剛頂經卷第三」(「頂」と「經」の間に「瑜伽」補入・別筆か)

(小口書)

(版心)

●員数 一 卷・帖・冊

●形態 卷子本、粘葉装、綴葉装、折本装、旋風葉装、袋綴装、折紙、豎紙、切紙、続紙

△欠損

●料紙 楮紙、楮紙打紙、斐紙、三楮

●印記 (e.g. 卷首「仁和寺／華嚴院」複廓長方朱印)

卷首「京都帝国大学図書之印」朱印

●版式・界線

活字

四周单辺、四周双辺、左右双辺

無界、墨界、押界、金界 天地墨界（天、地）

●法量・寸法

縦 25.0cm×横 14.2cm 7行 18～20字（第紙）

界高 20.2cm 界幅 1.7cm

全 墨付き 27 紙・丁・折（全行）

●本文

漢文 片仮名交り文 片仮名交り文ヲ含ム

校合・注記

裏書 函・押紙・付箋

紙背文書

●訓点（e.g. 朱点（仮名、ヲコト点・円堂点、声点、長寛三年））

朱点（仮名、ヲコト点・西墓点 永治二年）

墨による校合あり、中に「イ」注記あり

●奥書・刊記

裏表紙に隠れ 「永治二年二月廿八日移點已了 沙門長契」永治二年 1142

（伝領識語）（外題下）「心師御備用〔癸酉／〕」「求法〔肥後／〕 甚鏡房恕辰」（別筆）

（どちらも鎌倉時代以降の文字）

●本文書写・刊行年代（「鎌倉時代初期 貞応二年 1223 写」等）

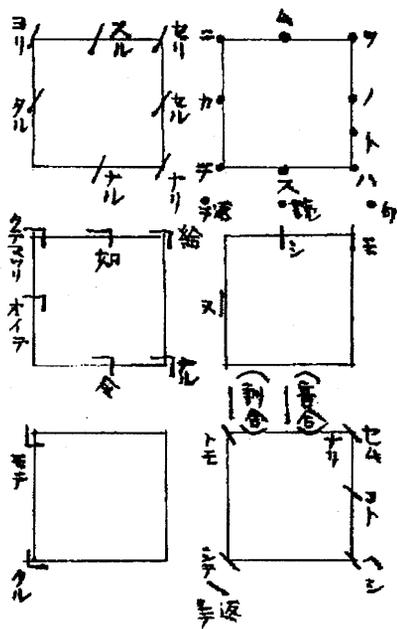
平安時代院政期書写・加点

●撮影 [全体 部分]

●備考

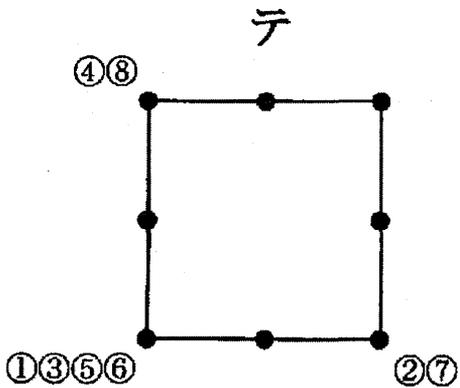
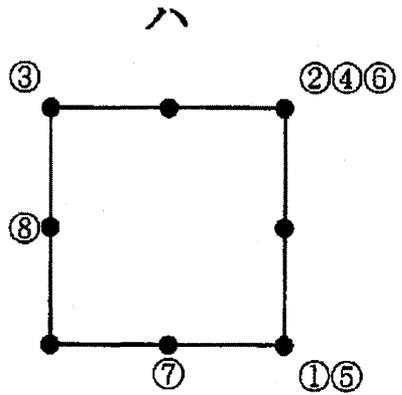
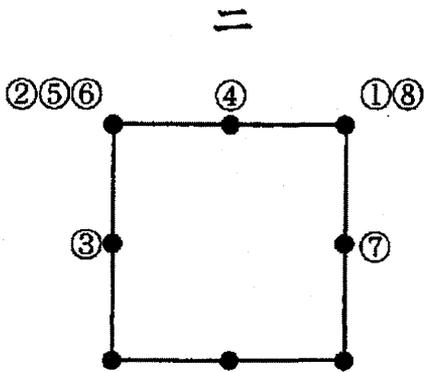
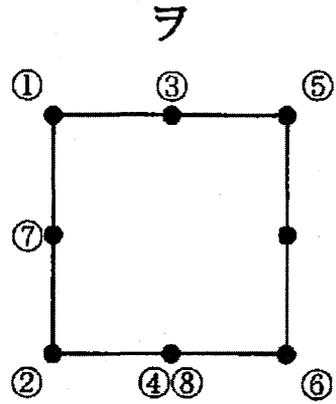
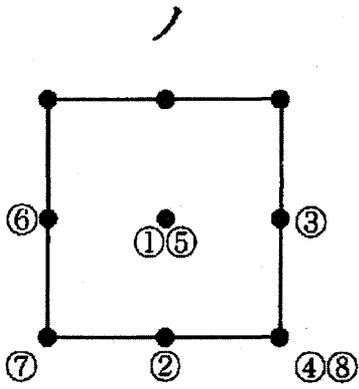
寄合書

▲【資料E】仮名字体表・ヲコト点図（実例） 勸修寺蔵金剛頂大教王経頼尊永承点」



ヨ	ラ	下 方	ハ	ナ (ナ)	太 タ	カ	ア
	リ (リ)		ヒ	ニ	之 シ	十 イ	
	ル (ル)	△	フ	又	頁 (頁)	夕	
	レ		へ		子 せ		
シ		モ			ト ソ	コ	

▲【資料F】星点位置一覧



「...」

7. 縛日羅羯磨^ニ

8. 從一切如來心纒出已一切如來羯磨平等^ヲ

一切如來心纒出已一切如來羯磨平等

9. 智善通達故金剛薩埵^ニ摩地即彼婆伽梵

10. 持金剛為一切如來羯磨光明出已以彼一

11. 切如來羯磨光明照耀一切有情界為一切

一切有情界為一切

12. 如來羯磨界其盡一切如來羯磨界入世尊

大正藏この下に「(合)」あり
彼大正藏「從」に作る

▲【資料H】訓点資料を讀む 京都大学文学部蔵 金剛頂眞經卷第三 卷首

先說令入盡無餘有情界拔濟利益安樂最勝
 悉地因果故入此大曼荼羅是器非器不履用擇
 先說令入盡無餘有情界拔濟利益安樂最勝
 悉地因果故入此大曼荼羅是器非器不履用擇

廣

次當說金剛弟子入金剛大曼荼羅儀軌於中我
 先說令入盡無餘有情界拔濟利益安樂最勝
 悉地因果故入此大曼荼羅

(訓み下し文例)

▲次 (に (は?)) 當 (に) 廣¹³ (く) 金剛弟子を金剛大曼荼羅に入るる儀軌を説く (べし)
[當 (再読)]。中 (に) 於 (て)、我▲先つ盡無餘有情界をして拔濟し利益し安樂する・最勝▲
悉地の因果に入ら令 (め) むか故に此の大曼荼羅に入 (る) ことを説かむ。

●訓み下し文 凡例

- 原漢文の字体は、原則として現代通用の康熙字典所載の字体 (いわゆる旧字体) とする。
- 原本の仮名は現行字体の片仮名で表記する。
- ▲によって行頭部分を示す。
- 原文の仮名は片仮名で、ヲコト点は平仮名で翻字する。
原文に「^{トクニ}解」とあるような場合、「^{トクニ}解クニ」とする。
補読した部分は「次 (に) 當 (に) 廣 (く)」のように平仮名で示し () に括る。
- ヲコト点の句点は「。」、切点は「・」、返点は「、」で翻字する。文意を示す上で、必要があれば、適宜「、」「。」を加える。
再読する文字は「未タ……ス [未 (再読)]」のように示す。
不読の文字は [之] [也] [矣] のように [] で括る。

13 「廣」字補入。